

一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
VOL.48 No.5
2024.11.1
(通巻 286号)
禁転載

CONPT

Conference for Newspaper
Production Technique-Japan

広報委員会編集
編集人 井上 努
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>



目次

JANPS in page2025に向けて 新局長に就任して	日本新聞製作技術懇話会 企画委員長 静岡新聞社 印刷局長 西日本新聞社 執行役員グループ技術局長 読売新聞東京本社 取締役制作局長・システム担当	福島知美子 …… 3 青木 伸人 …… 5 金丸 清昭 …… 6 津田 歩 …… 7
新聞大会		8
第15回CONPT技術研究会		8
第133回技術懇談会		9
新聞製作講座		9
美味あっちこっち 「大谷号外」拝見	富士フィルムグラフィックソリューションズ(FFGS)	佐藤 剛 …… 10 11
わが職場あれこれ	長崎新聞印刷センター 印刷センター長	河野 陽一 …… 12
CONPT日誌		12

- 表紙写真提供：CONPT TOUR2024 入選作より
富士フィルムグラフィックソリューションズ 巽 秀嗣氏「ベルギー・世界遺産ブルージュの景色」
- 表紙製版：(株)デイリースポーツ
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツ

JANPS in page2025に向けて

日本新聞製作技術懇話会 企画委員長 福島知美子

第24回新聞製作技術展(JANPS)が、2025年2月19日からの3日間、開催される運びとなりました。印刷・メディアビジネスの総合イベントpage展に日本新聞協会とともに、「JANPS in page2025」として出展するもので、会場は従来の東京ビックサイトから池袋サンシャインシティに替わります。

見本市的な展示会を 望む声に応える

JANPSは新型コロナウイルスの収束後、2024年12月に開催を予定していましたが、物価や人件費の高騰、新聞業界関連各社の出展意欲の低下などのため見送りとなりました。けれども、CONPTでは新聞業界に最適な技術を提供・共有できる場を設けたい、との思いは強く、「JANPS2024に替わるイベント」の検討を続けてきました。

新聞社や新聞協会技術委員会の情報技術部会、印刷部会と意見交換を重ねる中で、従来のJANPSのような見本市的な展示会を望む声が多数届けられ、2025年2月、実に7年ぶりとなる展示会を開催することを決定しました。

新聞業界を取り巻く 環境激変に対応

今回のJANPSにおきましては、新聞製作技術にとどまらず、新聞社および新聞業界で必要とされる技術全般を対象とした展示会を計画しています。これは、技術委員会およびCONPTで2023年から検討を続けてきた内容

に基づいております。

技術委員会では、2023年末に「出展メーカーや活性化策等に関する事前アンケート」が行われました。その回答を見ると、「最新技術の動向」「今後の新聞業界への提案」「新しいビジネスモデルを発想する機会」に期待する声が寄せられました。加えて、「すでに成熟している新聞製作分野に特化しない」といった展示会の在り方に対する提案もございました。

一方、CONPTの会員社を対象に実施したアンケートでも、技術委員会と同様の声が多くあがり、展示会の活性化を求める意見が寄せられていました。

新聞業界を取り巻く環境は、近年急速に変化しています。この変化に対応すべく開催する「JANPS in page2025」のテーマは「新しい時代に向けたDX 製作技術から総合技術へ」とし、製作部門だけでなく編集・総務・デジタル・販売・広告・輸送など幅広く最新技術・製品情報を発信してまいります。

セキュリティやNIE 輸送改革なども

本展示会では、最新の製作技術のトレンドはもとより、以下のようなご紹介も予定しております。

- ・サイバー攻撃への対応やセキュリティ対策を中心とした「総合技術」の展示。
- ・最新の製作技術のトレンドをはじめ、新聞協会が推進している「NIE (Newspaper in Education)」に活用できる技術、サー

製作だけでなく 新聞界が求める技術全般を発信

ビスなどをご紹介します、情報リテラシーや社会理解の深化をめざすことの重要性を提起。

- ・日々の新聞配達を支える販売店と本社の連携や、新聞輸送における効率化と課題解決の取り組みに注目。物流やコスト管理などの総合的な視点から、新しい輸送手法や協業のモデルを紹介。

こうした展示を通じて、新聞業界が直面する現代の課題に対する包括的な解決策や、今後の新規ビジネス創出における機会を多面的に発信できればと思っております。

総勢200社近くが一堂に 出合い・革新・創出

page展は公益社団法人日本印刷技術協会

(JAGAT)が主催するもので、page2025のテーマは「共奏」です。今回初めてJANPSが出展することになりますが、「共奏」という響きにふさわしく、異なる協会が協力し合って、新たなビジネスチャンスと共に創出できればと考えております。

page展には毎年150社近くが集い、幅広い分野での技術交流が活発に行われ、特設会場で行われるミニセミナーも毎年好評を博しております。JANPSが加わることで、総勢200社近くが一堂に会する場となります。

これにより、さらに多くの技術やビジネスパートナーと出会い、革新的なアイデアが生まれることを期待するとともに、有意義な展示会となるよう努めてまいります。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

新聞を支えるDX

【JANPS in page2025 出展社】
(11月5日現在、50音順)

- ▽朝日プリンテック
- ▽イワタ
- ▽インテック
- ▽コダック
- ▽システムック
- ▽ジュニファースoft
- ▽西研グラフィックス
- ▽SEOUL SYSTEM COLTD.
- ▽東芝デジタルソリューションズ
- ▽ネクステップ・ソリューションズ
- ▽日本電気
- ▽日本新聞製作技術懇話会

- ▽フジオー産業
- ▽富士フィルムグラフィックソリューションズ
- ▽フューチャーアーキテクト
- ▽HOUSEI
- ▽読売新聞東京本社
- ▽読売システック



新しい時代に向けたDX 製作技術から総合技術へ

2025年2月19日(水)-21日(金) 会場:東京・池袋 サンシャインシティ文化会館

*CONPTホームページにJANPS公式サイト(<http://www.janps.jp>)を開設します。
page2025サイトにリンクして、JANPS in page2025 の出展社リストおよび出展内容などを掲載する予定です。

新局長に就任して

印刷システム雑感

静岡新聞社 印刷局長

青木 伸人



印刷局員でありながらシステム担当、というポジションを拝命したのは入社2年目だった。当初は疑問にも思わなかったが、印刷関連システムといえども開発やテストに印刷担当者が立ち会うことはまずないよ？とメーカーから聞いて知ったのは2回目のシステム更新の時だった。やっぱりそうだよなあ、と合点がいった時には10年以上の歳月が流れており、すっかり局内の立ち位置は「システムの人」になっていた(実生活では未だに娘に教わらなくては携帯も使えないのに)。

*

2回目の更新ではCTP導入が行われ、製版部署をシステム管理部署に変更することになり、私も印刷部から刷版製版部(後の管理部システム設備課)へと異動となった。肩書もなく責任を感じることもなく印刷業務からも離れ、興味本位でCTP含めさまざまな新システムの開発とテストに携わり、上司に申告することもなく20連勤などをこなし(後から人事部に怒られた)、上流から下流に至るまで協議とテストに参加し続けた。今や「休むために仕事をしている」と公言して憚(はば)からない私とは思えない鬼畜ぶりである。

弊社の新聞製作システムはやや変わっており、広告システム、編集システムから印刷の各システムまで全てネットワークで繋がっている。輪転機で印刷する「全ての媒体」を一元管理しているのがウリなのだが、媒体が皆、個性にあふれている。まず一つ目の媒体は当

然ながら「静岡新聞本紙」なのだが、静岡新聞本紙というのが30年以上前からクセ者で、朝夕刊や編集特集号といった定期刊行物以外に広告特集号=チラシの発行を行っている。チラシ印刷は定期刊行物ではないため印刷日が固定されておらず、スポンサーによって印刷部数や用紙が異なるため、個々のシステムが印刷スケジュールを作成するとミスが発生するリスクが高い。これが広告システムから印刷システムまでネットワークで繋ぐきっかけとなっている。二つ目の媒体は受託媒体なのだが、大変ありがたいことに大小さまざまな媒体を受託印刷させていただいている。特に地方の新聞社としては地方の地域に根差した紙情報文化を守っていく責務があると考えており、日刊紙から不定期刊行物に至るまでさまざまな顧客に対応している。これもやはりシステムのNW化がなければ、各システムでスケジュール作成業務に忙殺される日々となっていただろう。

*

その様な理由によって運用されてきたNW化だが、図らずもビッグデータに始まるIoTやAIの時代となり、データ一元管理の利便性に着目点が変わろうとしている。ただし、このままでは限られたデータを個別のインターフェースによって受け渡ししているだけで情報が限定される上に、インターフェースという「関所」が新規の参入を阻む構造となっている。理想としては、個々の印刷関連システムのデータベース群ないし統合データベースなるものに全印刷関連システムがアクセスでき、個々に必要な情報を読み込み書き込む仕組みなのだが、各システムのDB言語の統一含む開発費だけで軽く億を超えるだろう。これを超える付加価値を生み出さなくてはやる意味がない。携帯ひとつ操作できないオジサン時代ではないなあ、としみじみしている今日この頃である。

「つなぐ」こそ重要な役割

西日本新聞社 執行役員グループ技術局長
兼西日本新聞プロダクツ技術本部長代理

金丸 清昭

6月27日、わが社の新旧役員交代懇親会の最中、ニュースサイト「西日本新聞me」が三菱重工機械システムの新聞輪転機事業からの撤退を速報した。仕事始めが、新聞社の存立にかかわる事態の情報収集。あるメーカーの担当から指摘された。「予想されていたのではないですか」。予想はしていた。正直に言えば考えたくなかったのである。

マラソンでは制限時間に間に合わないランナーを回収するバスがある。「もうバスは近くまで来ている」。今まさに、息も絶え絶えの私がそこにいるような気がして猛省した。

*

これまで新入社員に「新聞社は職種のデパート」と説明してきた。しかし、それは先輩たちが果敢に世の中に役に立つことを考えて情報を発信し、文化を育て、事業展開してきた証。多くの新聞社が文化事業、スポーツ事業を展開し、多角経営を成してきた。

技術面もそう。友好社との記事交換の枠組み構築とオンライン化。人事異動フォーマット、NSK-TIFF、NewsMLなどの標準化に取り組み、数々の課題を解決してきた。引き継ぐ立場になって「お前は何を成した」と問われた気がしている。

考えねばならぬことは二つある。まず「新聞発行を永続的に続けていくためにどうするか」。技術課題の答えは出ている。発行にかかわるコストの削減、そして新聞社同士の協力強化だ。上流部門でいえば、コンテンツの相互利用という観点で「面」「組」「素材」の単位で考えられる。例えば、共同通信加盟社の



負担になりつつあるスポーツ記録の処理に対する自動組作成。同業他社の技術的連携で実現し、業務効率が上がるとなれば、利用する社は多いはず。各社が得意分野を共有し合う枠組みも盛んになるだろう。

下流部門も現有の輪転機を長く維持するために協力体制を築くことができないか。部品の融通や印刷部数に対する設備の最適化…。「輪転機の共有化」を検討し、輸送網も含めて支え合う。できることは、まだあるはずだ。

もう一つは「新聞社が必要とされるために何をすべきか、できるのか」。各社共通の不変の課題と考える。言い換えれば、新聞の役割再定義。新聞社の機能を考えたとき、私の答えは「マッチングプラットフォーム事業」が一つの答え。信頼できる情報を提供し、その情報に基づき企業と企業がつながる、企業と個人、個人と個人がつながる…。これこそ新聞社が社会で担う重要な役割だと思う。

新聞は従来も経済面で企業同士、広告で企業と個人、社会面や投稿欄で個人同士を間接的につないできた。だが、さらに踏み込んで直接つなぐ。例えば、恋愛マッチングやマーケットプレイス、クラシファイド、講師派遣サービスなども、信用と信頼を長年築いてきた新聞社が運営すれば、より深い理解が得られるだろう。

*

風呂敷を広げるならば、東京都知事選立候補者が提起した「東京一極集中の解消」は、地域情報に密着した地方新聞社こそが解決可能だと確信している。マッチングプラットフォームで地域経済を活性化し、地域を再生、創生する。その実現が、私のこれから3年間の目標だ。

我々は「ランナー回収バス」に乗るつもりはありません。最大限、もがくつもりです。賛同をいただける方はお声がけを。一緒にやりましょう。ここに挙げたアイデアにこだわることなく、あらゆる可能性に取り組みます。

今のままではいけない

読売新聞東京本社
取締役制作局長・システム担当

津田 歩

「今のままではいけないと思います。だからこそ、日本は今のままではいけないと思っています」

9月の自民党総裁選に出馬した小泉進次郎氏の特異な言い回しが、ネットで「進次郎構文」と呼ばれ、物議を醸している。

父の小泉純一郎元首相も年金未納問題を国会で追及され、「人生いろいろ、会社もいろいろだ」と答弁するなど、発言が話題になることが多かった。政治部の「小泉(元首相)番」として走り回った日々を懐かしみながら、「進次郎構文」の不思議な味わいを楽しんでいる。

*

20年間の政治部勤務を終え、北海道支社編集部長を最後に、記者を卒業したのがちょうど10年前。制作局には2018年から2年間、局次長として勤務して以来、2度目の着任となる。

制作局の任務の第一は、言うまでもなく、「安定した新聞制作」だ。6月11日の局長就任直後から、まずは豪雨や地震などに対する備えの点検を始めた。

ところが、最初の「激震」は思わぬ早さで、思わぬ方向からやってきた。6月28日、三菱重工機械システムが「輪転機の新台製造撤退」を発表したのだ。

全国で50セット近い三菱製輪転機で新聞を印刷している読売だけでなく、新聞業界全体への打撃は計り知れない。「えらいタイミングで局長になっちゃったなあ」というのが正直な気持ちだった。

それでも、嘆いてばかりはいられない。読売の生産体制を根本から見直す機会ととらえ



て、様々な検討を始めている。

三菱機のメンテナンスをどう維持していくかは、業界全体の重い課題となった。三菱側に対応を求めると同時に、新聞社側もこれまでの考え方に縛られずに知恵を出し合い、いい解決策を見つけられれば、と考えている。

*

最初の制作局勤務を終えた2020年、読売新聞東京本社の物流子会社「読売ロジスティクス」を設立し、その初代社長に就任した。新聞輸送のトラックを活用してほかの荷物を運ぶことで、物流業界の人手不足の影響緩和に貢献し、同時に、運送会社に副収入を得てもらって、読売の輸送網を維持・強化するのが目的だ。

しかし、設立当初はトラックの活用が思うように進まなかった。最も大きな障害となったのは、関係者の保守的な意識だった。

つい数年前までは、新聞輸送をお願いしている運送会社の「副業」に、新聞社側は消極的だった。新聞の印刷から販売店到着までを管理する分単位のスケジュールを狂わせる可能性を、少しでも排除したかったからだ。その空気感は、運送会社も共有していた。

しかし、新聞輸送の売上が発行部数とともに減少する状況に手をこまねいていたのでは、各運送会社、ひいては読売の輸送網全体が大打撃を受けることになる。新聞社側にも運送会社側にも意識の変革をお願いし、今ではかなりの収入を運送会社側にもたらすことができるようになった。

*

新聞業界を取り巻く環境は、今後も大きく変化していくことだろう。我々も変わらなければならない。

冒頭で触れた「進次郎構文」を借りて、その決意表明としたい。

「(新聞業界は)今のままではいけないと思います。だからこそ、(読売新聞制作局も)今のままではいけないと思っています」

新聞大会、秋田市で開催

第77回新聞大会(日本新聞協会主催)が10月16日、秋田市のあきた芸術劇場ミルハウスで開かれ、新聞、通信、放送各社の代表者ら約370人が参加した。秋田で新聞大会が開かれるのは1974年の第27回大会以来50年ぶり2回目となる。

SNS(交流サイト)や生成AIにより偽情報や誤情報が拡散することに懸念を示し、「平和で豊かな未来に向け、私たちは正確で信頼される情報を届ける」との大会決議を採択した。

中村史郎日本新聞協会長(朝日新聞社会長)は挨拶の中で、新聞そのものの存在感の低下や製作サプライチェーンの脆弱化といった、新聞業界を取り巻く厳しい環境に触れつつ、「総選挙や米大統領選、ウクライナや中東での戦闘など、内外ともに激動する今、私たちには確かなニュースを届ける責務がある」と述べた。



大会冒頭に挨拶する秋田魁新報社の佐川博之社長

続いて、新聞協会賞6件(朝日、中日、北國、神戸、日経、京都)、新聞技術賞1件(朝日・北海道)、新聞経営賞1件(西日本)の授賞式が行われた。

記念講演では、小説家の島田雅彦氏と平野啓一郎氏が「新聞の今とこれから」をテーマに対談。研究座談会のパネルディスカッションは、第1部「新聞は生き残れるか」を中村史郎新聞協会会長がコーディネーターを務め、第2部「デジタル時代のジャーナリズム」は山崎浩志新聞協会編集委員会代表幹事がコーディネーターを務めて開催した。

AIで挑んだ働き方改革

—第15回CONPT技術研究会

日本新聞製作技術懇話会は、7月5日に第15回CONPT技術研究会を開催した。「富山県が生成AIとマルチモーダルAIで挑んだ働き方改革」をテーマに、インテック社会基盤事業本部事業戦略統括部辻本元春氏が講演した。新聞社関係21社31名(内オンライン22名)、CONPT会員社11社16名(内オンライン6名)の47名と事務局3名が聴講した。

【講演の要旨】富山県は日本全体より10年早い1998年に人口のピークを迎えた。その後の人口減少と高齢化により、行政サービスの維持が課題となっている。この背景を踏まえ、働き方改革によって労働人口を確保し、職員のウェルビーイング向上を通じて行政サービ



スの質を高め、住民のウェルビーイング向上につなげるのが急務となっている。

今回の富山県の実証事例では、自治体職員の業務効率化を目的に、マルチモーダルAIと生成AIを利用した実証実験が行われた。

マルチモーダルAIは、映像、画像、音声、文章などの複数の情報を総合的に扱うAI技術である。この実験の目的は、「書類データ化」

「書類データ検索」「書類データ活用」の3つのプロセスを通じて、業務を効率化することである。

書類データ化では、マルチモーダルAIと生成AIを活用し、紙のスキャンデータやPDF、Word、Excel、画像など多様な書類をデータ化する。次に、書類データ検索では、チャット形式の書類検索を導入し、自然言語

での質問によりテキスト文書や画像情報の検索が可能となる。書類データの活用は、パンフレットの内容を基にYouTubeなどで情報発信するためのセリフ形式の台本を生成することができる。

今回の取り組みが、2040年問題で自治体が抱える課題解決に向けた先進的な事例となることが期待される。

「メディアとAI」テーマに

——第133回技術懇談会

日本新聞製作技術懇話会は10月3日、第133回技術懇談会を開催した。共同通信社のニューズレター「メディア戦略情報」の編集長尾崎元氏が、5月にコペンハーゲンで開催されたWAN-IFRA（世界ニュース発行者協会）の「世界ニュースメディア大会」の概要について講演した。また、欧州メディアのAI活用事例にも触れ、具体的な取り組みを紹介した。懇談会には、新聞社関係7社11名、CONPT会員10社16名、事務局3名が参加した。

【講演の要旨】大会では「海図なき航路と新たな波」をテーマに、急速に進化する生成AI（Generative AI）技術がニュースメディア業界にもたらす影響と課題を取り上げた。また、欧州メディアが生成AI技術をどのように活用しているのかについて事例を交えた説明があった。

新聞社にとって、自社のみでの生成AI技術開発が難しく、ハイテク企業との協業が不可欠であるとの見解が示された。一方で、生成AI技術を用い選挙結果に影響を与えよう



とする選挙妨害の増加が懸念されると指摘されている。

過去にはインターネットやスマートフォン、ソーシャルメディアの登場がメディア業界に大きな変革をもたらしてきた。今、新たな変化として、生成AIの登場により膨大な情報がネット上で収集され、個々の読者に最適化されたコンテンツが提供される時代が到来しつつある。生成AIによって作られたニュースがパーソナライズされ、読者ごとに異なる形で届けられる未来が見えてきた。新聞社は情報の仲介者としての役割を失うリスクに直面しており、これに対応するには従来の枠組みを超えた新たな戦略が求められる。生成AI革命は、さらに破壊的な変化を引き起こす可能性が高い。

新聞製作講座 オンラインで開催

日本新聞協会の新聞製作講座が10月24日、25日にオンラインで開催され、107社1,670人が参加した。

初日の「上流コース」では、午前中に朝日新聞社と北海道新聞社による統合編集システムの共同開発に関する講演が行われた。午後には、能登半島地震時のStarlink活用をモデル



に、災害時の通信手段確保についてKDDIが講演を行った。その後、各新聞社からBCP(事業継続計画)や災害対策に関する報告が続いた。さらに、システム内製開発の事例も複数の新聞社から発表された。

2日目の「下流コース」では、全日本トラック協会が物流の2024年問題への対応と新聞輸送について講演を行い、続いて朝日プリンテックがブランケット復活装置の概要と開発経緯を紹介した。午後には、新聞協会印刷部会長唐澤幸伸氏をコーディネーターに、「安全で働きやすい工場」をテーマにしたパネルディスカッションが開催された。さらに、実務者による「創意と工夫」の発表も行われた。

3年ぶり「新聞社の主要製作設備一覧」

日本新聞協会技術委員会は『新聞社の主要製作設備一覧』(2024年版)を11月下旬に刊行する。刊行は2021年以来3年ぶり。

本書は、各新聞社の本紙を印刷している印刷工場を対象に、主な製版、印刷、発送関連設備のほか、輪転機のセット構成、主要印刷媒体、工場所在地などを収録している。

●CONPTのホームページを更新

8年ぶりに開催されたdrupa2024などを視察したCONPT-TOUR2024の報告会が大変好評をいただきました。講師を務めた小林知之氏(日経東日本製作センター)と石毛淳美氏(朝日新聞社)が使用した説明資料を、CONPTのウェブサイトにてダウンロードできるようにしました。スライドは視察内容をより深く理解するために役立ちますので、ぜひご活用ください。(https://conpt.jp/)

魚河岸 大作(静岡市)

ランチにも軽く一杯にもおすすめの一軒です。

ご存知の方も多いかも知れませんが、静岡駅に隣接している飲食店街に店を構える「魚河岸 大作」です。

ランチは刺身定食、焼き魚定食など選択肢も多く、ボリュームも適量。刺身定食は並定食(1100円)でも中トロを含む4種盛りで十分に満喫出来ます。最近立ち寄った際には、旬の「生シラス」を単品追加注文して味わいました。

夜も地場の海鮮を中心にメニューが豊

美味あつちこつち



ボリュームもちょうどいい

富、良心的なお値段なので安心して吞めます。

駅に隣接しているので、新幹線の乗車もスムーズです。でも、吞み過ぎないようにご用心。

FFGS
佐藤剛

ドジャースの大谷翔平選手(岩手県奥州市出身)が、大リーグ挑戦7年目で初めてワールドチャンピオンの栄冠を手にした。

大谷選手は今期ドジャースに移籍、右肘手術のリハビリのため投打二刀流を回避して打者に専念。大リーグ史上初の50本塁打・50盗

塁達成や本塁打王、打点王の2冠に輝くなど数々の記録を打ち立て、ワールドシリーズに臨んだ。ヤンキースとの東西対決は10月31日(日本時間)、ドジャースの4勝1敗で決着した。

「最高の1年」と語る大谷選手の活躍を伝えた出身地の新聞、岩手日報の号外を紹介する。

大谷「最高の1年」



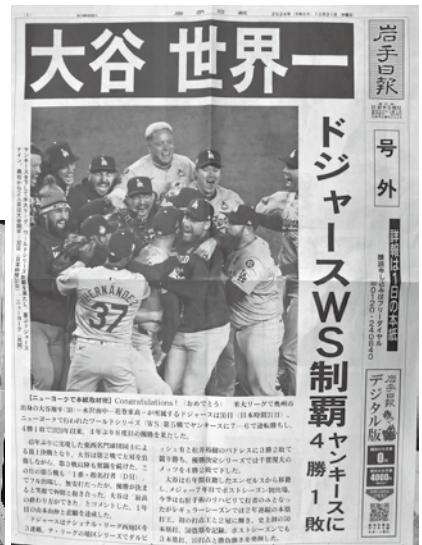
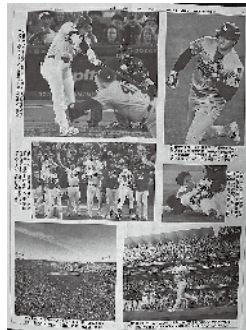
〔50-50達成号外〕

【ドジャース優勝】第5戦は、3時間40分を越える熱戦。第2戦で肩を傷めた大谷選手は、8回表に打撃妨害で出塁、逆転勝利につなげた。

号外は2ページペラ。ニューヨークに派遣していた特別取材班の原稿を待って、午後1時28分に印刷開始、2時13分に刷了した。発行部数は3万9000部。県内では盛岡、花巻、北上、奥州で配布した。11月1日付朝刊と号外のセット販売も実施した。

【50-50達成】9月に入って、前人未踏の50本塁打・50盗塁達成の期待が高まり、号外発行を検討していた。9月20日(同)のマーリンズ戦。現地マイアミに派遣していた特別取材班のカメラが決定的瞬間を捉えた。

〔世界一号外〕



〈故郷の新聞 紙面・号外を拝見〉



〔11月1日付本紙社会面〕

輪転機は点検の予定があり、早朝から印刷部員を確保していた。9時に印刷を開始。2ページペラのため、多少トラブルが発生したが、9時50分に刷了。発行部数は34000部。県内では盛岡、花巻、北上、奥州で配布した。21日付朝刊に号外2部をつけたセット販売も実施した。

この号外は野球殿堂博物館(東京都文京区、東京ドームに隣接)で展示された。

(この記事は岩手日報社のご協力をいただきました)

わが職場

長崎は今日もにぎやか

長崎新聞印刷センター 印刷センター長 河野 陽一

長崎新聞印刷センターでは現在4つプロジェクト活動に取り組んでいる。「輪転機管理G」は輪転機の整備状況の管理。「工場管理G」は工具類、予備品、消耗品の管理、工場内の安全チェック。「紙面品質管理G」は紙面の見当精度、印面濃度、紙面体裁の向上。「電気担当G」は輪転機、付帯設備(発送機器含む)の管理、補修を行っている。これにより工場内の整理整頓、紙面品質の安定化、経費・損紙削減、電気系整備の内製化、なにより労災がなくなった。それぞれのグループ内で若い部員からも意見が出るようになり好循環が生まれている。今後も労災「0」、紙面品質向上、経費削減に取り組んでいく。

話は変わるが、地元長崎が活気を取り戻している。西九州新幹線開通から丸2年が立った(リレー方式ではあるが…)。これに伴い長崎駅周辺、長崎空港に近い大村駅周辺は街並みが変わりつつある。そして今年は、某大手通販会社が手がけた長崎スタジアムシティが完成。こけら落としでは長崎出身の有名アーティストがフリーライブを行い大盛況だった。翌週にはこちらも長崎出身の有名アーティストが「長崎から能登へ」と題しチャリティーコンサートを開催。さらに、島原市にある島原城築城400年記念では島原城上空をアクロバット飛行チーム「ブルーインパルス」が飛行し盛り上げた。他にも紹介したいイベントが沢山あるが、行数が足りない。コロナ禍もひと段落し他県からの観光客や修学旅行生を多く見かけるようになった。皆さんもぜひ長崎に遊びに来んね。

CONPT 日誌

- 6月17日(月)企画委員会(出席6名)
- 20日(木)クラブ委員会(出席7名)
- 27日(木)評議委員会(出席9名)
- 7月5日(金)第15回CONPT技術研究会 = インテック(於日本記者クラブ・大会議室、50名参加、内オンライン28名)
- 11日(木)広報委員会(出席6名)
- 22日(月)CONPT-TOUR2024視察報告会(於日本記者クラブ・大会議室、68名出席、内オンライン30名)
- 9月2日(月)JANPS in page2025出展説明会(於日本新聞協会・8階会議室、42名出席、内オンライン23名)
- 9月12日(木)広報委員会(出席5名)
- 17日(火)企画委員会(出席5名)
- 19日(木)クラブ委員会(出席6名)
- 26日(木)評議委員会(出席9名)
- 10月3日(木)第133回技術懇談会 = 共同通信社・尾崎元氏講演会(於日本記

者クラブ・大会議室、30名参加)
11月8日(金)第16回CONPT技術研究会 = HOUSEI (於日本記者クラブ、大会議室、41名参加)

◇本誌に連載しました「新聞製作技術の軌跡」全29回を一冊にまとめました。購入方法は、CONPTウェブサイトでご案内しています。
<http://conpt.jp/kisekibook.html>



定価2200円(税込み)